

抗議文

四国電力株式会社 取締役社長 佐伯勇人 殿

10月27日深夜の伊方原発3号機の闇討ち再稼働に断固抗議する！

先日の広島高裁異議審の仮処分破棄の不当決定、再稼働前日の広島地裁の仮処分申請の申し立てを却下した後、寸刻を惜しむかのような再稼働に心底からの怒りを禁じ得ない。

社会通念上、原発事故の確率は無視できると決定に書かれているが、原発は万が一にも事故を起こしてはならないものだ。しかし、現実には、政府や規制委員会の言うように何万年に一度起こるか起こらないかという確率ではなく、わずか数十年の間に少なくとも三度破局的な事故を引き起こしている。

さらに、社会通念を云々するのであれば、世界の潮流は脱原発であり、世論の過半数は原発反対である。原発賛成の立場であっても、ほとんどの人は 原発が危険だと 感じている。従って、社会通念上は原発は危険だから要らない、というのが事実であり、伊方原発3号機の再稼働が認められる道理は成り立たない。

加うるに、私達地域住民は原発の建設から稼働、再稼働に至るまで一度として容認したことは断じてない。原発は故郷や地域社会と共存することはできず、あらゆる生命は放射能と共存することはできない。原発は事故を起こさなくても膨大な放射能と有害物質を環境中に放出し、全ての生命の生存権を脅かす。さらに温排水は、海水中の夥しい数の生命を奪う。故郷のかけがえのない自然を汚染し、壊しながらでなければ稼働できないのだ。

私達は、このような危険で罪深い電気なんか要らない。原発を稼働することは、例えようのない犯罪行為であり、それを行う四国電力は犯罪企業に他ならない。故郷のかけがえのない自然環境と、そこに住む全ての生命の生存権を奪う権利など、誰一人として持ち合わせてはいない。一企業に過ぎない四国電力にあらうはずもない。

私達は安心、安全で幸福な生活と、未来に続く全ての生命の繋がりを守りたい。その願いと伊方原発は共存することは決して出来ない。中央構造線の真上に存在し、地殻変動の激しい佐田岬半島に存在する伊方原発は、そこに存在すること自体が許されないのだ。

近い将来、南海トラフ巨大地震が必ず起こるが、その時住民が 被曝することなく避難するのは不可能である。瀬戸内海沿岸に住む 約二千万人の住民の生存権を奪いかねない伊方原発3号機の再稼働を直ちに止め、廃炉の手続きを開始せよ。自然災害 はその予知もままならず、決して止めることはできない。しかし、原発は止められる。電気は足りており、発電方法はいくらでもあるではないか。日本が世界の技術大国であるという自覚があるならば、世界の潮流に逆らって原発にしがみつくとなく、自然にやさしい再生可能エネルギーに移行せよ。

四国電力は、地域社会に貢献できる企業として経営方針を転換せよ。原発は地域社会を衰退させるのみならず、滅亡させる可能性を持ち、絶えず地域社会を脅かし続けるものだ。従って一刻も早く伊方原発全ての廃炉を決定し、地域社会と共存できる企業に生まれ変わるよう強く要望する。

2018年11月11日
第32回伊方集会参加者一同